

アメリカ在住の日米国際結婚家族の子どもの文化的アイデンティティの構築 2

矢吹理恵
東京都市大学

【問題と目的】 (1) 日本人が関わる国際結婚家族において、異文化出身同士の夫婦の文化がどのようにぶつかりあい、せめぎあい、新しい家庭秩序が創出されるのか。そして、そのプロセスを通じて、個人と家族はどのような心理的発達・変容を遂げるのかを明らかにする。日米国際結婚を選んだのは、日本人女性の国際結婚相手の国籍のうち、アメリカが戦後一貫して上位を占めていることによる。

(2) 日米国際結婚家族はその生涯発達において、妻(母親)の国日本と夫(父親)の国アメリカ(場合によっては、第三国も)を往来しながら、暮らしている。本研究で展開するのは、次のことに対する理解である。①日米国際結婚家族が、夫(父親)の国アメリカに居住する場合、家族関係や子育てがどのように変容するか。②多文化社会であるアメリカに居住することで、家庭内が多文化状況(父親がアメリカ人、母親が日本人)にある子どもが、自らを何人として定義し、日米どちらの文化をより多く摂取し、どのような文化的アイデンティティを構築するのか。

本発表は、②について日本人母親(妻)・アメリカ人父親(夫)が与える要因について検討する。

【方法】 本研究は、母集団が少なく多様性が高い集団である国際結婚の子どもを対象として、彼らの「文化的アイデンティティ」と「文化的志向性」の構造と形成過程を質的に明らかにしようとする。そのための研究方法論として「解釈的アプローチ(ガーゲン, 1989)」を採用する。

<ライフヒストリー法と観察法> まず、第一対象者である日本人妻(母親) 20名に、ライフヒストリーを聞き取った。続いて、「家庭秩序の文化的志向性」について聞き取り、それを彼女らのライフヒストリーの文脈において、分析した。続いて、第二対象者である青年期以降の子ども(第一対象者の子ども) 14名に、「自分を何人と位置づけるか」という「文化的アイデンティティ」について聞き取りを行った。これらと同時並行で、対象者の居住環境・学校環境についての参与観察を行った。

【結果】 I <子どもの文化的アイデンティティの型>

子どもの文化的アイデンティティについては、以下の4つの型が見られた。

- 1 「**Bicultural — 日本人でもありアメリカ人でもある**」: 日米両言語に堪能であり、両文化に適応するが、両文化におけるメインストリームであるというアイデンティティはない。アイデンティティの中核にあるのは、「日米文化両方をモザイク的にもつ多文化人」。
- 2 「**日本語を話すアメリカ人**」: 英語が第一言語。日本語のレベルは中級から上級。アイデンティティの中核にあるのは「アメリカ人」。
- 3 「**日本語は話さないが、日本文化を愛好するアメリカ人**」: 英語が第一言語。日本語のレベルはゼロから初級。アイデンティティの中核にあるのは「アメリカ人」。メディアを通じて日本のアニメ・漫画・テレビドラマなどを愛好。
- 4 「**アメリカ人**」: 英語が第一言語。日本語レベルはゼロか初級。アイデンティティの中核にあるのは「アメリカ人」。日本文化に関心を示さない。

II <子どもの文化的アイデンティティを規定する日本人母親(妻)・アメリカ人父親(夫)の心理的要因>

1 日本人母親(妻)の渡米年齢

渡米年齢が①高校卒業以下である場合と、②日本で短大・大学以上の高等教育を受けてから渡米した場合では、子どもの文化的アイデンティティに与える影響が異なった。①は渡米後の日本人母親のアメリカ文化への同一視が②よりも強い傾向がみられ、結婚後に家庭内で日本の文化実践を行おうという傾向が弱かった。②は家庭内で日本の文化実践を行う傾向が強く、日本語や日本文化を子どもに継承させようという意志を持ち、子どもを日本語ブレイグループ・日本人学校・日本語イマージョンスクールに入れようという傾向が強かった。

2 日本人母親(妻)の結婚前の、異文化への同一視

結婚前に、留学(長期・短期を含む)・海外旅行・英語課外学習体験・外国発の芸術や大衆芸能への愛好・外国人との付き合い・両親の異文化愛好志向がある場合には、結婚後にアメリカにおける家庭内の文化実践をできるだけ日米バイカルチュラル(日本の文化実践のみに固執することなく)にしよとする傾向がみられた。

3 アメリカ人父親(夫)の結婚前の異文化への同一視

日本人母親(妻)が家庭内にどれだけ日本の文化実践を取り入れられるかを左右する要因がこれにあたる。アメリカ人父親(夫)が結婚前から異文化に関心がない場合は、日本人母親(妻)が日本の文化実践を家庭に浸透されることが難しかった。その場合、日本人母親(妻)のみが現地の日本人コミュニティと関わるが、アメリカ人父親(夫)と子どもは関わらない傾向が見られた。他方、アメリカ人父親(夫)が結婚前に異文化への同一視があり、特に日本の文化実践への関心が見られる場合は、日本人母親(妻)を通じて日本人コミュニティと関わり、家庭内の文化実践を日米バイカルチュラルにしよとする傾向がみられた。

4 日本人母親(妻)とアメリカ人父親(夫)の家庭内での勢力関係

夫婦の勢力関係を規定する要因として、現段階では次の四つが上がった。①自らの文化的志向性へのこだわり(矢吹, 2011)の強さ、②夫婦のどちらの出身の地域で暮らすか、③夫婦の性役割観と地域の性役割観の一致度

【参考文献】 矢吹理恵 2011. 国際結婚の家族心理学 — 日米夫婦の場合 —. 風間書房.